

平和への願いを語り継ぐ

語り継ごう！

戦争の悲惨さを…

考えよう、平和の尊さを…

そして私たちの次の世代へ

つなげよう、この思いを…

新潟市

1 戦争と新潟市

(1) 戦争の影

明治元年11月19日（西暦1869年1月1日）に開港した新潟港は、昭和6（1931）年9月の満州事変のぼつ発、昭和7年の満州国建国及び前年9月の上越線の開通によって、満州国の首都新京（現在の中華人民共和国吉林省長春市）と東京を結ぶ最短距離の港として注目され、多くの人が兵士や満州国の開拓民として新潟から海を渡りました。



▲満州新潟村開拓団員を募集するチラシ
(提供：蒲原宏氏)



▲新潟港から出港する満州国開拓移民団の見送りの様子



▲新潟駅前での満蒙開拓青少年義勇軍歓迎式
(提供：豊照小学校)

成人による農業移民とは別に、それを補うものとして、16歳から19歳の青少年が、訓練を受けた後、開拓団として満州に渡りました。新潟港から満州へ向かう新潟県出身者の部隊を送る盛大な壮行会は、児童に対する宣伝でもありました。新潟から海を渡った人々の中には、戦争終結後も帰国できないまま亡くなる人が大勢いました。



▲新潟港を出港する「月山丸」の様子
(提供：豊照小学校)



▶新潟港から大陸への航路図

(2) 戦争の拡大

日本は、昭和12（1937）年7月に中国と日中戦争を始め、昭和16年12月には、アメリカ（ハワイ）の真珠湾を攻撃し、太平洋戦争を始めました。

戦争の拡大にともない、新潟からも多くの人が兵士として召集されるようになりました。



▲萬代橋を渡って出征兵士を見送る人々

兵士として召集された人々は、役場や親類の開く壮行会で盛大な見送りを受け、のぼりや旗、楽隊を先頭に、駅やバスの停留所まで送られて出発しました。



▲出征兵士に贈った千人針

さらしの綿布に1,000人の女性が、赤い糸で一針ずつ1,000個の縫い玉を作り、「武運長久」、「弾丸よけ」を折って出征兵士にお守りとして贈りました。

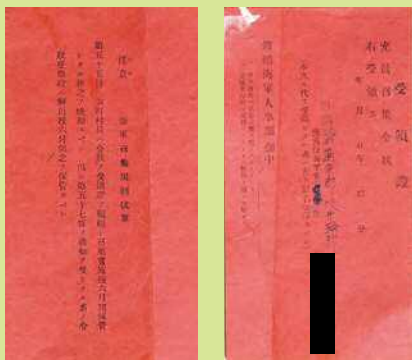


▲街頭で出征兵士に贈る千人針の縫い玉を求める子ども

召集令状が来てから入営まで1週間ほどの間に、1枚の千人針を完成させるのは大変な苦勞でした。



◀戦没者の葬儀



▲昭和17（1942）年の召集令状受領証（表・裏）
集合日時・集合場所・入隊する部隊名が書かれた召集令状（「赤紙」）が、市町村役場から家々に配られ、召集が通知されました。



▲戦没者の遺骨の出迎え（提供：豊照小学校）

戦線が拡大し、出征する兵士が増加するにつれて、戦没・戦傷者が多くなりました。戦没者の遺骨の出迎えと市町村葬が頻繁に実施されました。

戦没兵士、出征兵士の増加は、国内の深刻な労働力不足をもたらしました。

労働力として朝鮮や中国から強制連行された人々、新潟市内の捕虜収容所に送られた欧米などの外国人捕虜も、過酷な労働条件のもとで働かされました。

学生も勤労奉仕や学徒動員により、軍需工場などで働きました。

教育の面では、昭和16（1941）年、大日本青少年団の結成と国民学校令の公布により、戦時訓練と戦時教育が強化されていきました。

生活の面では、国民精神総動員運動のもと、町内会の下部組織である隣組が重視され、報国貯金、金属類の買い上げ・回収の徹底、生活物資の配給や収穫物供出の取りまとめなどに活用されました。



▲剣道の訓練をする男子児童（上）、なぎなた 雑刀の訓練をする女子児童（下）

昭和16（1941）年（提供：大野小学校）

どの学校でも体力を増強し、忍耐の精神を鍛えることとして、児童に過酷な訓練を強いました。また、「道場」としての学校環境をつくるために、体育館や教室の中まで神棚が設置されたり、日の丸の額や山本五十六大将の写真などが掲げられました。



▲隣組の「報国貯金箱」

隣組の常会出席の際、決められた金額を各自の名前の書かれている投入口に入れて貯金しました。相当金額に達した時は、国債などを購入する資金にしました。



▲分列行進をする豊照国民学校児童
昭和16（1941）年（提供：豊照小学校）

少年団旗を先頭にした班単位の集団登校が見られるようになり、分列行進の訓練なども、毎日のように行われました。



▲勤労奉仕で進められた護国神社建立の整地作業

昭和17（1942）年6月から、現在の中央区船見町の保安林の一部を、県下各市町村の隣組及び各種団体、学生などが勤労奉仕で整地しました。

(3) 戦局の悪化

昭和17（1942）年6月、日本がミッドウェー海戦でアメリカ軍に敗北して以降、各地で日本軍は敗れ、戦局が悪化しました。また、この頃から日本の各都市がアメリカ軍の爆撃機により、空襲を受けるようになりました。

日本軍は、空襲や機雷封鎖により太平洋側の港湾を使えなくなったため、本土決戦態勢下で新潟港を重要な港と位置付け、短時間で多くの物資を陸揚げし、各地へ輸送することとしました。そのため、船舶を守る高射砲部隊や爆撃機を探照灯でとらえる照空部隊などの陸軍部隊と潜水艦や機雷対策、船舶擁護のための海軍戦隊が新潟市内に配置されました。

昭和20年になると、アメリカ軍のB29爆撃機が飛来し、新潟港を封鎖するためにたくさんの機雷を投下しました。機雷は分かっているだけで781個にのぼります。



▲船体を半ば沈めた「海麟丸」

昭和47（1972）年、新潟西港入り口で航行中、機雷に触れて突然爆発。大音響とともに船体は左に傾き、数十秒で沈没しました。



▲戦後、新潟港から引き上げられた機雷

『新潟港修築史』（運輸省第一港湾建設局）から新潟港へのB29爆撃機による機雷封鎖は合計12回に及び、新潟市の沖合や港内、信濃川にばらまかれ、陸上に落ちた機雷もありました。



▲防空演習の様子（提供：竹中將視氏）

焼夷弾攻撃を予想し、バケツリレーによる消火訓練が行われました。また、空襲の本格化に備えて、事前に空襲による延焼を防ぐために建物を撤去（建物疎開）し、住んでいた住民を強制的に疎開させました。



▲戦後、栗ノ木川から引き上げられた高射砲弾

新潟市上空に飛んできたB29爆撃機に対し、新潟市内に配置された陸軍部隊が、高射砲で反撃をしました。敗戦後、日本軍の武器や弾薬が、川に捨てられるなどして処分されました。

(4) 敗戦

昭和20（1945）年3月、アメリカ軍のB29爆撃機から焼夷弾による大規模な空襲が行われた東京大空襲により、約10万人が亡くなりました。また、沖縄にアメリカ軍が上陸し、民間人を巻き込む凄惨な戦闘の末、約18万人（県民の4人に1人）が亡くなりました。

8月6日広島、8月9日長崎に原子爆弾が投下され、広島では約14万人、長崎では約7万人が亡くなりました。

原爆投下の報告を受けた当時の新潟県知事畠田昌福は、8月11日に新潟市民に向けて、新潟市内からの緊急疎開を命じました。

しかし、新型爆弾（原子爆弾）が、次は新潟市に投下されるかもしれないという噂により不安になった市民は、既に8月10日から疎開を始めており、新潟市内からほとんどの人がいなくなりました。

8月15日、日本は連合国に無条件降伏し、戦争は終結しました。



▲人員疎開を命じる知事布告

アメリカは、昭和20（1945）年7月16日に原爆実験に成功し、同年7月25日には原子爆弾の投下目標を広島・小倉・新潟・長崎のいずれかに選定していました。新潟県知事畠田昌福をはじめとする県の幹部は、8月10日の艦載機による攻撃を受けた後で会議を開き、新型爆弾の次の投下は、大空襲を受けていない新潟市かもしれないと予想しました。11日、知事は、一般市民の急速かつ徹底的な疎開、重要工場の能率的な疎開、公共施設の疎開を命じることを決めました。



▲艦載機の銃爆撃を伝える記事

新潟日報：昭和20（1945）年8月11日付

昭和20（1945）年8月10日、艦載機による大規模な攻撃を受け、新潟市内で多数の死傷者を出しました。15分間ほどの攻撃でしたが、新潟市民は大きな衝撃を受けました。疎開命令の知事布告前に、新型爆弾が次は新潟市に投下されるかもしれないという噂に動揺した市民は、大八車やリヤカーに荷物を積んで逃げ、郊外へ通じる道は、逃げる市民で埋めつくされました。

新潟市内で戦災のあった主な場所

昭和20(1945)年7月2日 午後5時頃

【新潟鉄工所の定期連絡船「第一鉄工丸」】

新潟鉄工所入船工場から対岸の山ノ下工場へ向かって出発していた「第一鉄工丸」が引いていた舢舨(はしけ:河川・港湾などで大型船と陸との間を往復して貨物や乗客を運ぶ小舟。船幅が広く、平底)が機雷に触れ爆発しました。この舢舨には、勤労動員の生徒や新潟鉄工所の職員が70人ほど乗っていました。この爆発により、新潟鉄工所に勤労動員中の生徒12人と新潟鉄工所の関係者16人が死亡。24人が負傷しました。その後、生徒1人と新潟鉄工所関係者1人が負傷が原因で死亡しました。

水戸教公園
(平和祈念碑)

新潟交通入船営業所
新潟造船株式会社

みなとびあ
(新潟市歴史博物館)

新潟市役所

朱鷺メッセ新潟

新潟駅

宇品丸
慰霊塔

昭和20(1945)年8月10日

【新潟港港外での被害】

艦載機の攻撃を受け、貨物船「第七万栄丸」は船長ら船員2人が死亡。貨物船「よりひめ丸」は船員1人、兵士1人が死亡。海軍徴用船「第三新潟丸」は船員1人が死亡。「第七星丸(七星丸)」は船員3人が死亡。新潟港海警備隊付属艇は機雷掃海中に攻撃を受け兵士1人が死亡しました。

昭和20(1945)年7月17日 昼頃

【新潟飛行場】

艦載機十数機が来襲。ロケット弾や小型爆弾を投下し、大格納庫を爆破。整備教育用双発輸送機3機が焼失しました。

捕虜収容所第15分所
(現在の東区桃山町)

新潟空港

捕虜収容所第5分所
(現在の東区小金町)

昭和20(1945)年8月10日

【下山地区】

阿賀野川河口、排水機付近に艦載機から小型爆弾が投下され、その破片を浴びた住民1人が死亡。1人が重傷を負いました。

昭和20(1945)年8月10日

【風間小路】

西堀前通10番町と11番町との風間小路にロケット弾が投下され、家屋1軒が全壊し、隣の家屋の2階部分が損壊。機銃掃射により、市民2人が死亡。5人が重傷を負いました。

【新潟鉄工所入船工場】

ロケット弾で屋根が損傷。工員1人が死亡。5人が重軽傷を負いました。

昭和20(1945)年8月10日

午前11時50分頃

【佐渡汽船の貨客船「おけさ丸」】

佐渡島から新潟港に入港し、佐渡汽船岸壁を目指し航行していたところ、信濃川河口で艦載機の機銃掃射を受けました。船橋(航海中、船長が操船・通信などの指揮に当たる所)後方の甲板を中心に170から180発の銃弾が船体を貫通しました。死亡者15人(船員1人、乗客14人)。重軽傷者23人。

昭和20(1945)年8月10日

【陸軍軍用船「宇品丸」】

昭和20(1945)年7月6日、新潟港灯台付近で機雷に触れ、船底から浸水。沈没を免れるため、全速力で入港し、他の船の航行に支障がないように新潟鉄工所造船工場ドックより下流の浅瀬に座礁させ、錨を打って船を固定していました。船には船員約50人と船舶防衛のための陸軍船舶砲兵や機関砲兵等、兵員約100人が乗り込んでいました。昭和20(1945)年8月10日、「おけさ丸」と同時に艦載機の攻撃を受けました。乗組員が高射砲、機関砲で応戦しましたが、船尾にロケット弾が命中し、船内で火災が発生。弾薬庫に火が回り、次々と誘爆。弾丸が陸地にまで飛散し、一昼夜燃え続けました。死亡者19人(船員3人、兵士16人)。

2 平和への思い

(1) 平和祈念碑

■ 建立について

第二次世界大戦が終結してから、多くの時間が経過しました。

今、私たちは豊かな社会の中で、平和を享受し、戦災の記憶は次第に失われつつあります。

故国を離れた幾多の戦場で、新潟市出身の多くの人々が犠牲になりました。

新潟の港や市街地でも、銃爆撃や触雷で尊い命や財産が失われました。

また、強制連行され、あるいは捕虜となってきた外国の人々の多くも、新潟の地で亡くなりました。

新潟市の今日の目覚ましい発展は、こうしたたくさんの尊い犠牲の上に築かれていることを忘れてはなりません。

再び悲惨な戦争が繰り返されることのないよう、戦災の歴史を後世に伝え、恒久平和を願うシンボルとして、市域において最も激しい戦禍にあった新潟港を望む水戸教公園に、平和祈念碑を建立しました。

■ 平和祈念碑のデザイン

碑は、入り日に向かって未来永ごうの平和を祈る人々の合掌の形をかたどっており、それぞれの形が呼応し、より大きな祈りとなって届くようにとの願いが込められています。

そして、大小の形は、世代を超えて恒久平和を語り継ぐ姿を表現しています。

新潟市が一日で最も多くの戦争犠牲者を出した8月10日には、日本海を照らす夕日が、この碑の中心に沈むように設計されています。



■ 平和祈念碑の概要



設置場所	水戸教公園 新潟市中央区雲雀町18番地
設置年	平成10（1998）年 8月10日
構造規模	《本体》材質 稲田産白御影石 （内側）本みがき仕上げ （外側）ワリハダ・ノミ キリ・みがき仕上げ
高さ	大 3.5m 小 2.6m
《碑文》材質	アルミブロンズ 鑄造
大きさ	60cm×100cm
台座	稲田産白御影石 本みがき仕上げ

みとせきょう(みとおしえ)

■ 水戸教の由来

信濃川の河口にある新潟港の入り口には、川の運ぶ土砂と日本海の荒波によって浅瀬や中州ができました。瀬は動き、港へ入る水路は日々変わりました。危険な港口を熟知して、港へ入る船を安全に誘導する仕事と、その仕事をする人のことを水戸教と呼びました。江戸時代の中ごろから昭和の初めまで、水戸教は伊藤仁太郎家の人々が務めました。日和山や海岸の高い砂丘の上にやぐらを立て、沖合の船を見て、入港する船があればこぎだして誘導しました。また、難破しそうな船の救助にもあたりました。水戸教は長年にわたって新潟港の繁栄を支えてきました。水戸教公園は水戸教のやぐらが立っていた付近に整備された公園です。



■ 水戸教公園へのアクセス

八千代橋線・東堀通線・西堀通線入舟営業所行き乗車
入舟営業所下車 徒歩5分
新潟駅前バスターミナル4番線から八千代橋線乗車で
乗換えなく行けます。

3 これまでの平和への取組

(1) 平和祈念碑献花式

昭和20（1945）年8月10日は、新潟市で最も戦禍が激しかった日でした。

アメリカ軍の艦載機16機が新潟に飛来し、市内各所で銃爆撃を行ったのです。

新潟港では佐渡島から入港した直後の「おけさ丸」をはじめ、貨物船や掃海艇など多数の船舶が銃撃を受け、多くの方が亡くなりました。また、7月6日に触雷し、港口近くの州に乗り上げていた陸軍軍用船「宇品丸」^{うしなまる}は、艦載機に応戦。激しい銃撃戦の末、炎上しました。

この日の死者は、判明しているだけで47人にのぼっています。

新潟市では、毎年この8月10日に、新潟港を望む水戸教公園に建立した「平和祈念碑」の前で献花式を行い、第二次世界大戦で亡くなった人々に対し、深く哀悼の意を表し、世界の恒久平和を祈念しています。



(2) 原爆犠牲者追悼式

昭和20（1945）年8月6日広島、8月9日長崎に原子爆弾が投下され、多くの方が亡くなりました。また、多くの方が現在も後遺症に苦しんでいます。

新潟市では、毎年8月6日と8月9日に、新潟県原爆被害者の会、新潟市職員労働組合との共催により、原爆被害者の追悼式を行っています。



(3) 「平和」と声に出して集まりましょう！

新潟市では、毎年8月6日のヒロシマ原爆犠牲者追悼式後に、市民団体「灯（あかり）の会」、新潟県原爆被害者の会との共催により、新潟西おやこ劇場によるコカリナの平和コンサートや、前年度に広島平和記念式典派遣事業に参加した生徒の平和への思いについての発表、原爆詩の朗読、参加者との意見交換などを行い、平和について考えるイベントを実施しています。



(4) 新潟の戦争の記憶をたどるツアー

新潟市では、身近な地域で起きた戦災について「平和祈念碑」や「宇品丸慰霊塔」、「みなとびあ（新潟市歴史博物館）」などをバスで回り、当時の状況に思いをめぐらせたり、平和の大切さについて考えるツアーを実施しています。



(5) 広島平和記念式典派遣事業

新潟市では、市内の中学生及び新潟大学の留学生を広島へ派遣し、平和記念式典への参加や被爆体験者の講話、広島平和記念資料館の見学などを通じ、戦争の悲惨さや平和の尊さについて考える平和学習を行っています。

この派遣事業の成果を後日行われる「にいがた平和祈念のつどい」で報告し、新聞形式にして学校等へ配布しています。



(6) 非核平和都市宣言

平成17（2005）年10月10日、核兵器の廃絶と世界の恒久平和を願い、また日本海が「平和の海」になることを強く望み「新潟市非核平和都市宣言」を行いました。

(7) 日本非核宣言自治体協議会加盟都市

新潟市は、平和宣言を実施した自治体間の協力体制を確立することを目的とする日本非核宣言自治体協議会に、平成18（2006）年から加盟しています。この協議会では、生命の尊厳を保ち、人間らしく生きられる真の世界平和実現に寄与するため、全国の自治体、さらには全世界の自治体に対し、人類と地球の破滅をもたらす非人道的な核兵器の廃絶、そして平和宣言の実施を呼びかけています。

(8) 平和首長会議加盟都市

新潟市は、世界の都市が緊密な連携を築いて世界の恒久平和の実現に寄与することを目的とする平和首長会議に、平成20（2008）年から参加しています。この会議では、核兵器廃絶に向けた市民意識を国際的な規模で喚起し、人類の共存共栄を脅かす飢餓、貧困、難民、人権などの諸問題の解決や環境保護への努力が議論されています。



新潟市非核平和都市宣言

わたしたちのまち新潟市は、
日本海に面した潟町、また、実り豊かな田園地帯として発展してきました。
いま、市町村合併によって、新・新潟市に生まれ変わり、
水と緑に恵まれた魅力ある国際都市として、
本州初の「日本海政令市」を目指しています。

先の大戦で、わたしたちは、尊い生命や貴重な財産を失いました。
新潟市は、広島・長崎と並ぶ原爆投下予定地のひとつでした。原爆を怖れ市民が一斉避難した日もありました。
あれから60年。
わたしたちは、現在のわたしたちの暮らしが、戦争による多くの方がたの尊い犠牲の上に成り立っていることを
忘れてはなりません。そのことを後世に伝えていかなければなりません。

核兵器の廃絶と世界の恒久平和が、わたしたちの永遠の願いです。
しかし、いまだに世界各地で紛争が絶えません。
飢饉、貧困、差別、人権侵害、環境破壊……、平和な暮らしを脅かすものが、世界に満ちています。
わたしたちの暮らしす北東アジアでも緊張関係が続き、核兵器の脅威が強まっています。
わたしたちは、核兵器の不拡散、そして廃絶を強く訴えます。

わたしたちの安心で安全な暮らしを脅かす全てのものを無くすこと。
地球上の全ての人びとが、平和で豊かな暮らしを送ること。
地球全体が、共生互恵関係を築き、ともに繁栄発展すること。
それが、わたしたちの願いです。世界の人びとの願いです。
わたしたちは、そのために不断の努力を重ねていきます。

海のむこうは、友となる国ぐに。
わたしたちは、世界の平和のかけ橋となります。
子どもたちの未来のために。
わたしたちの暮らしす北東アジアの人びとが、世界の人びとが手をとりあって、
日本海を「平和の海」に！

新しい新潟市誕生の記念すべき年に、
核兵器の不拡散、そして廃絶を願い、
環日本海の友好・交流の拠点都市として、
北東アジアをはじめ広く世界に向けて、
新潟市が非核平和都市であることをここに宣言します。

2005年10月10日 新潟市

※当パンフレット中で所蔵者の記載がない写真は新潟市所蔵です。

問合せ先

新潟市 総務部総務課 2015.3 初版
〒951-8550 新潟市中央区学校町通1番町602番地1
TEL 025-226-2409 FAX 025-228-5500 E-mail somu@city.niigata.lg.jp